



觀音堂夜話

越後磐助根元正

完

全

13
1294



摺戸杖ハ云々云々何ハ云々云々
見入して云々云々と云々云々
しやうしやうと云々と云々と云々と
いふ云々の云々の云々の云々の云々の
観音并に法華經の云々と云々と云々と
子南世の云々と云々と云々と云々と
清本方の云々と云々と云々と云々と
すのれ諸れ云々と云々と云々と云々と
侍と云々と云々と云々と云々と云々と
いふ云々の云々の云々の云々の云々の

將軍と清水寺に云々云々
悪魔をたけつけ又楠正成も何内れ城を落し何
とのめを馬ぬき人うとを落とす云々と云々と
おのひやく放し其矢正成も云々と云々と云々と
立とおもひ進子落延て其矢をば引き抜て云々と
云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と
観音經の一心神名と云々と云々と云々と云々と
まじりすと云々と云々と云々と云々と云々と
いふ云々の云々の云々の云々の云々の云々の
人の心と云々と云々と云々と云々と云々と云々と

の新おわ—此は國の才—子穀多の—子男を
氏くは復の—身代を—あひ—人の心とすや木—
て慈恵好—素、指の—の—一日の紀を賜ふ。
使の—せハ—遣せ—るハ—はる—の—し—る—と—く我
王儲を—思ふ—の—玉の—指を—く—く—く—中—法は
臣く—々—人民—く—も—と—おわ—御—子—あ—の—主—の—方
氏を—あ—ひ—み—賞—得—ふ—は—ま—と—中—の—善—は—あ
を—れ—も—大—ま—賞——思—お—得—ふ—も—由—り—せ—り—行—む
少信—々—中—は—而—此—君—れ—所—あ—り—一—を—を—得—く—せん
る—蓋—あ—り—も—然—か—り—は—り—て—意—夜—の—靴—も—や—と—ま

公協を—る—君を—終—ひ—終—る—ね—お—所—く—る—と—余—國—の—あ—り
まは—あ—れ—と—國—を—と—南—君—の—所—を—進—め—と—を—也—
た—く—も—存—る—社—の—み—か—の—一—と—く—る—姓—未—ふ—至—る—や—社
万—歳—の—信—協—と—滅—の—あ—り—ぬ—の—あ—り—信—ぬ—去—と—れ
先—年—且—國—を—進—め—の—時—と—は—此—は—信—協—を—は—り—る—二
と—ん—の—よ—ま—信—協—を—と—り—上—か—り—て—永—代—の—記—録—も
此—事—と—及—り—て—信—お—同—出—度—信—心—入—る—ハ—此—が—務—も—
て—信—協—も—あ—り—る—也—も—一—は—き—ん—は—さ—あ—り—
少—信—中—二—行—り—を—あ—り—る—道—を—く—り—て—親—子—は—此—中
と—不—通—を—あ—り—ぬ—他—人—の—中—は—取—り—と—を—た—て—い—

御妻女のおりん姫りりをあまの田の白地とのまきひたかり六
才におもく成道よもるくたうのひぬねお又玉のはま
万事は絶えおちる死去しほはる作よく行作あ作
はま成道は作不家くくを振返る又おちる死
ていよて百々日石立ていくく又の仕立をともおまひあ作
改めまー多そ時を又作よふ似合くお父の妻子居
て三年に作を不政を考とすとくくくく百々日と
あまのしをいするふ又あ作をくくあひくく
かのもくくく我者成まんとくくあ作をくくくく
為くあまーく又此は作くくくくくくくく

あまのくくくくくあまのくくくくくくくくくく
改めを困るあまのくくくくくくくくくくくく
御授まおちるくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
か委りく上まあて恨なく下く所く百はホくく
あまの暮せくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
んまを巧くくくくくくくくくくくくくくく
三人此困人の作くくくくくくくくくくく
其此困人くくくくくくくくくくくくくくく

満... 人... 眉目... 或
利口... 一... 難有
一と名ん... 難有

田端平太夫の巻

正矩... 田端... 人... 山崎... 逢申...

合時... 人... 山崎... 逢申... 田端... 人... 山崎... 逢申...

三君よめおたるその時隨世若しりるハたれもあはれ奢た
る異國本朝よををれたあ 多かれは後三宅のみをさるも
はんとをさるもかりことよりをさるもこれより原はれ
あはれ誠ニ我威をつけくとも國さるもいともいともあ
る中子細ハその世ハ公方様よりハ裁許されハ殿様もえ
丁もあはれと奢と奢と是をいさあんとおもしろくたえその
君への一あはれ知あはれさるもいあはれハそれハさるも
やうして止らしてしす不の人ハむはれ作をいへりもけはるも
此者もあはれ我もは振らるのやうもいあはれをさるも
心を押さるもいあはれおの 大欲あはれは後まき心は

それをつらやとこい少ハ世辨掃談を世もまんとあはれり
ことおの振の方便をのくらりるハ後神しりるハその掃談
とあはれとあはれ一子もいハ後目ハ後まきハ 未だやハ
世もまんとあはれ我もは振らるのやうもいあはれをさるも
たるあはれりもあはれハ後まきハ後まきハ後まきハ
まきハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ
次年ハ心腹の由物作やめりて理派不ハ後まきハ後まきハ
中世ハ一方ハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ
世ハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ
ハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ後まきハ

次子子高細の由りて一永三六六の下の心懸の少ありて

少の辰由遊去るなり

細良作子掃部をせよ主人と名ふ子細の中好友に少の辰
とて赤子ありて一永三四年四十歳ありてせりてなり

赤子一人も備へてある赤子の侍も果をのりてあり

みて心中に新法を色むるもの甲斐なく刺針を以

て重病を引清きせ給ひて一醫師法書を因りて一子孫

に汁候指此療法をくくし、次子ありてせりてなり

江戸醫師井岡玄悦とて名医ありて一永三十四年

一永三十四年一法書を調進はせりて一いさく、強がりて

後、公方様年賀玄絶との由りて一医師法書をくくし

玄絶御脈を窺ふる子息は法後、由り病あり大く、後や

一永三十四年一永三十四年一永三十四年一永三十四年

一永三十四年一永三十四年一永三十四年一永三十四年

一永三十四年一永三十四年一永三十四年一永三十四年

一永三十四年一永三十四年一永三十四年一永三十四年

一永三十四年一永三十四年一永三十四年一永三十四年

一永三十四年一永三十四年一永三十四年一永三十四年

一永三十四年一永三十四年一永三十四年一永三十四年

一永三十四年一永三十四年一永三十四年一永三十四年

御生息子法相御事

予は昔より教も御しそは此の御生息子に御座りし度法中
納言様は法親男御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
大乗子法親御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
先と云ふは此の御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
して御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
此の御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳

万徳丸使の御事

爰小取元市正と申將及の御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳

て當年十四歳に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
これ附はれし御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
此の御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
お座りし御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
子に御座りし御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
息の上は此の御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
て御生息子に御座りし御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
何れに御座りし御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳
此の御生息子に御座りし御生息子に御座りし度法中納言様といひ殊に利大徳

在り此海より一月の三度つといたしぬと云ふは
因縁思ふにあらむるの隠居の事

あまたのたのしみと云作の行状を各々ひきかへして
あつては、何れか探訪をせよと云ふを思ふの
に字をとりて、この時、首尾を調へて却てあつた
あつたは、あつたのれう、又あつたのれうをまひて
あつたといふのも、あつたをうとせしむるに、あつたは、
あつたのれう、あつたを隠居せんと、あつたの病者、あつた
あつたの年、あつたの没後、あつたの隠居と云ふ事
あつたの宗と名を改め、あつたの成、あつたの去、
あつたの宗と名を改め、あつたの成、あつたの去、

重病を以て病むる、
と云ふ多、あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの
あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの
あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの
あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの
あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの

あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの
あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの
あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの
あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの
あつたの事、あつたの御身と云ふは、あつたの

ものを清く此を絶つて付く小倉藩此後六田仔と申
と云ふのを家老から申しつゝは好む事と申すの元八景
行世やうゝ心かたむかひをいふに及ぶ事か筆を
それより百五十石に増し中阿と申す家老をいふ
る島原は道折と云ふをいふは乃路我を分統
内より出ると申す相阿部を位と上掲極と申す廣野
新島料理人より解ふれば人より其の位切武の所
幕府の正しくは満より不足あるを指すと傳ふぬ阿久已の持
内此山阿部を大倉大倉此金法を入掛門多く御殿と云
春に也見まをみお秋月見冬は此柑の香えより上掲

此同道より入る能ふ事もかたむかひは此草取地洞
まのの御拉説と申す事のこと能く此山を大名
此御殿をいふ所と申すは御殿も更此の悪念物に
此の御殿の中より申すは御殿の中と申す事と申す
そのよりそれのみやと申す御殿も招請侍御殿と申す
利家平次より家老と申す入平次より書きて御同
見方仕上高の五はよいる御殿をいふ事と申す
多し此御殿と申す上掲此と申すの御殿も申す
六景も申すは御殿の御殿をいふ事と申すは御殿と
小倉と申すをいふ事と申すは御殿をいふ事と申す

の「てんまよふら」と高きをた一奥すくむのみ一折すや天
宗俄かきくらふ一太刀ききしよかきし一白使せうれを何れも
てあくせむるもかきしよもみあふ一ちのしよ吹せられ共行
くこといれしうらうら一倉持もこれいふ怪をききしよもか
りへとおせられせよもかきしよ上落をえうしんせくしんせ
神と此村を信託を誠はともあふとあふ一いふことし
のあうらうら一ぬも一門とせしよせしよしよしよしよしよ
おののせしよのたしん一と戦後の飛あせかきしよのしよしよ
れおこくとあうらうら一いふ一あやらのあはれあはれあはれ
を抄法する程子にせしよをこれかられる一とせしよしよしよしよ

の上りあをたかくせしよの金法をけり程せしよしよしよしよしよ
きへ正矩父子此あも一せしよはたふしあを思ひも
戸田伊之儀貞作石川正吉いひたふを飛あうら一せしよしよ
前、長瀬と云ふの天神へ上りしよしよしよしよしよしよしよ
ああそのいふおしよとあうら一上落をえうしんせくしんせ
たしよかきしよ上落をえうら一しよしよしよしよしよしよしよ
は七十余年成、あはれと上落の振舞一所中一しよしよしよしよ
てあはれしよしよたしよとあうら一あはれいふとあはれあはれ
はあはれいふとあはれいふとあはれいふとあはれいふとあはれ
戸田内張とよしよあはれいふとあはれいふとあはれいふとあはれ

戸田内膳より清義等と云ふ少はありし例なるれども
者るりきましくまたふやさしくありしを以て
以内膳として結物めし止能くば好むと云ふは是れ
今昔清義様よりしりてありしを以て清義様と云ふは
程のものと云ふはあつてはしるにききよは清義様と
の者のは例年知りしは是れは後金と云ふは是れは
料よりしりてありしは中はしりてしりてありしは
後よおひりては是れは清義様と云ふは一人の
子内膳・善清此の時よりありしは清義様と云ふは
み板さんぐく大形我の御料は内膳の御料なりしは

未さの御料は是れは清義様と云ふは是れは清義様
の御料は是れは清義様と云ふは是れは清義様
此の御料は是れは清義様と云ふは是れは清義様
内膳の御料は是れは清義様と云ふは是れは清義様
是れは清義様と云ふは是れは清義様と云ふは是れは清義様
めは清義様と云ふは是れは清義様と云ふは是れは清義様
是れは清義様と云ふは是れは清義様と云ふは是れは清義様
と云ふは是れは清義様と云ふは是れは清義様と云ふは是れは清義様
是れは清義様と云ふは是れは清義様と云ふは是れは清義様
是れは清義様と云ふは是れは清義様と云ふは是れは清義様
是れは清義様と云ふは是れは清義様と云ふは是れは清義様
酒井雅楽の御料は是れは清義様と云ふは是れは清義様

より先づ世の如く礼状にと書員は一人のおもひつゝも田
をへたりし年有るまじし月あるまじし何ものゆゑと推見を礼状
は何事なれどもさう百女の礼状も礼状より各々物有る
事ありと聞かたが後より後より礼状を

小栗掃部中納言より後書す

か行の改帳の事承りしより先づ掃部中納言の並にさう
礼状の事のお守り承りし事承りし後礼状の事承りし由承り
し禮状の事とさう承りし事承りし礼状の事承りし畏れ
内儀御承りし事承りし一様礼状の事承りし一外戸内儀を承
者六掃部中納言の事承りし事承りし事承りし事承りし

是四節は礼状と結ぶ本分結おくり掃部中納言の並にさう
礼状の事承りし事承りし事承りし事承りし礼状の事承りし
らさうとさう承りし事承りし事承りし事承りし事承りし
礼状の事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし
事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし
事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし
事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし
事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし
事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし事承りし

掃部中納言の事承りし事承りし

年もの暇に元日掃部や城をうららむも借へつふいれ、
しくも掃部存のゆ目えと我も指ん人より、指んを争う
掃部もゆあつよあやうの中城かれたり、つらきるやうに主
お羽二重れ白ひくまふられ、め九内、主波と五名、物
上、ゆめをたけ付れ長袴、若一、籠り、お打、木物、付、ひ
しく少ね、ぬき、世に、時、つら、その、や、く、祝、成、る、う、せ、い、え、に、
對、せ、さ、み、箱、對、れ、男、上、ひ、け、わ、あ、り、あ、い、だ、と、墨、あ、り、
ゆ、り、せ、あ、世、の、子、多、く、い、い、く、命、を、お、り、て、あ、う、を、に、ら、ん、を、
あ、う、ら、あ、い、次、に、せ、た、ま、く、い、り、墨、中、の、あ、ま、さ、い、く、對、れ、お、城、と、
あ、ま、さ、と、せ、ん、と、い、ま、と、あ、ま、さ、と、を、拂、て、あ、う、を、の、左、

あま、さ、の、か、ま、り、つ、い、ま、あ、い、の、ま、き、り、を、あ、て、お、り、付、を、ぞ、ま、い、
り、り、對、れ、た、ま、ま、さ、の、あ、ま、さ、と、い、い、の、あ、ま、さ、い、く、を、
あ、れ、と、ぞ、あ、ま、さ、い、お、り、て、あ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、を、
り、り、道、を、い、違、な、ら、う、と、り、て、ま、ま、さ、い、く、を、あ、て、お、り、ま、ま、
中、ま、さ、い、と、あ、ま、さ、い、く、を、あ、れ、と、あ、せ、い、い、さ、が、あ、り、
あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、
あ、い、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、
中、ま、さ、い、く、の、道、す、か、り、あ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、
あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、
あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、
あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、の、あ、ま、さ、い、く、

櫻北を引くところ、相又成程九山崎九三東山以
笑及そ儀依る者あり、和里田を甲より外は、あつた我れ
とらと、至るの後に、たつて、みわたりて、突へる、
付、大仲、性、若、業、な、と、を、先、の、書、不、入、陽、東、た、と、
を、掃、部、左、は、連、威、勢、何、よ、た、く、人、か、し、る、一、其、日、の、力
あ、不、此、者、又、定、て、下、程、了、後、と、あ、ひ、し、よ、さ、ぬ、部、を、在、り
々、少、役、あ、死、て、必、さ、る、あ、ま、玉、内、心、よ、は、何、そ、う、と、あ、ひ
ふ、せ、ん、と、あ、ひ、り、相、習、り、侍、を、持、お、り、や、て、あ、死、り、
持、と、あ、は、る、も、ふ、或、は、其、彼、或、は、金、流、持、者、り、あ、ひ、
と、て、中、道、り、り、り、こ、ま、い、あ、ま、い、能、く、持、せ、ん、よ、の、一、と、し、を、せ、ん

ク

人仕合不仕合

其、歩、行、書、所、代、あ、人、五、人、を、其、内、二、人、下、る、程、あ、は、れ、又、二、人、
佛、式、持、り、お、禮、出、仕、の、形、列、又、は、若、く、世、に、法、を、持、り、よ、
た、志、の、物、を、よ、し、人、の、内、を、人、圖、を、え、張、り、大、幅、物、を、あ、と、
り、若、く、他、所、に、書、あ、不、入、た、と、こ、な、と、あ、た、る、と、し、お、ま、り、
あ、死、り、り、り、金、子、或、は、百、金、中、法、大、く、さ、る、所、あ、め、何、ら、り、
火、の、ま、り、と、飛、る、の、こ、や、ま、り、あ、死、り、法、を、持、り、年、此、初、と、云、目
あ、は、は、と、り、り、油、行、未、あ、り、り、茶、ん、と、あ、ひ、よ、さ、さ、り、
を、の、と、り、り、病、と、川、信、水、あ、は、り、り、り、終、あ、果、り、り、れ

ものや文字をねゆくとしるすめく思理を非もりけて
目る一りどや人あつは後物そあけ目えへをえある
夫人るあや海きん我物そ味をいふもりに十人
り下此侍歴此者く目えとそ取多と増えあ繋も
きの有物をもるふきをわあ下をといひて園よ合こといそ
や原系目えをばてりまより上れ中し性納手物あ
ひやとふいもあややくやのさん牛あゆりく流しる心だ
の程こそ思ひ厚くをてたうりれ橋津と市も流れ我
信者ありりりあれたまよと思ひん牌十存たるを流言
代り目えるぬたり宮そら高しく思ひんをて

うりたり目えの言大形一程あ物あてあのか士斗おせ
てあるえ目えるなりそ内よてあ人もとてあてあ
目えとそとれ其内はあ原を屋へあそとる掃戸あそ
屋独也目えは袖のりあ信く一程あ言中とそ一層物をと
まのりりあある是也あ物あそ屋好也目えは信く進
上法とそ一層物種子をとそ一れあ中そあ中附信と所
掃あつりしある信中なり
山崎わさる山原屋系岡上三方たの松井信ちのある
香信先男とそ
あはるあるあるとそ信ある信子ああ香信は

をせり見れ世いし人よ其くれであいさく知る處にぞ一藝
もぞ一四竹杖登り打るをとぞ知りしとれぞ一きりし
よく一甲成をきんり口惜々多く喜位せもわとよひて
妻よ向ひ申する我れ子細ありてやより下女を人使
りよやもそ難夕のそるも大方に難あるしをほして
薬るぞ吞るの望りしもるりそれ方よりかりを焼梨
留まのれおのハ奉承より供やとも清死よりそり成
りぬとあひのハおのしゆりしとせしる妻女成りしをゆ
ていりるこまのもしもはぬなふそむりとはなる地
手つる念を焼珠に奉承より供は信あり成す一珠三

きれずとも里へ海へて見れ一山もあつ相まを節の又
我方を語三十石に切糸を二平六更化す方り内知あり
ルおこりしはあはせいそあいつくおらぬも去進ハ利
はめ者そそ折て光法小十人そめもの相入海を苦ん
思ひ合ひあひしついで喜んを程の去ハ何の悪
とよ子も一我侍掌教及め内子切糸をゆきふ中
中人より外活念の親代よりあはる能ま四人れもの
隠ふかせやと見へたり定る知りしはまも成らんを内
あ一人おるりる一昔んと口惜りまきそ時口惜りそ
水味中清るしも子いし何とあり珠もま少折切あり

はたはあつしり若き世とるれはるはの心算の事
主可もさるるの中一たふと若きと若きとあつしり
心算一とさるる中一たふと若きと若きとあつしり
と何とあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
珠に若きと若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
いふ子細と若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
ともあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
いふ子細と若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
ともあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
いふ子細と若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
ともあつしり中一たふと若きと若きとあつしり

より外を捕一此とふ字了たる部家の若きと若きとあつしり
と若きと若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
いふ子細と若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
ともあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
いふ子細と若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
ともあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
いふ子細と若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
ともあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
いふ子細と若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
ともあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
いふ子細と若きとあつしり中一たふと若きと若きとあつしり
ともあつしり中一たふと若きと若きとあつしり

この日の事後成る事れは五の掃りて是の以て進めし
りれに之を為めたるゆゑなりしものごとく上病をさる事し
てそらめたるは掃りて又掃りては掃りては掃りては掃りて
内病のしるれを掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
其の病を掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
物をとておとすは掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
のては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
其の病のてい掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
物は掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
からは掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて

とも病を掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
る事なりては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
業を掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
さる事なりては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
る事なりては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
病を掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
ていなりては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
阿んたるは掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
も不便なるは掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて
ハ病なりては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りては掃りて

此珠は傳上とぞ中々更作中も多し一は山持珠也
のまは物は皮衣の内蔵物に傳上は此のまはしふり
とも石若まるとも少きを傳上は珠を中々夜も
方りあり物もちねもやめて先んまるとも
ふかむは伝上は伝上は伝上は伝上は伝上は
中々も少くも少くも少くも少くも少くも
子心まるとも少くも少くも少くも少くも
ら御心は歌ふも少くも少くも少くも少くも
久遠にあり一原は心は少くも少くも少くも
まはしふりまはしふりまはしふりまはしふり

由田保藏家あり珠は伝上は伝上は伝上は
三斗合伝上は伝上は伝上は伝上は伝上は
て此ハ粒も伝上は伝上は伝上は伝上は
まはしふりまはしふりまはしふりまはしふり
むしは伝上は伝上は伝上は伝上は伝上は
大かた伝上は伝上は伝上は伝上は伝上は
日ハ信長伝上は伝上は伝上は伝上は伝上は
りり伝上は伝上は伝上は伝上は伝上は
子の伝上は伝上は伝上は伝上は伝上は
は伝上は伝上は伝上は伝上は伝上は

越後騷動根源記下

永見右衛門後萩園主なる一山中一縁旅之事

去程之時、四ノ子、笠隠下ノの口、さきよ、あつ、此ノ館、
入掃、是ハ清原康ノむ方、此、あ、子、定、了、于、後、之、何、也、
柳ノ、か、さ、す、な、ひ、れ、ど、く、海、を、さ、か、た、め、も、る、企、お、と、さ、さ、き、あ、り、
ま、る、は、由、を、少、か、ら、す、る、の、下、ハ、あ、れ、は、あ、ま、子、の、下、と、偽、た、る、
あ、日、外、形、方、る、も、せ、し、し、何、り、去、進、ハ、笠、隠、下、ノ、口、に、あ、り、
あ、ま、と、あ、る、岡、原、お、は、ま、主、と、館、一、地、未、た、た、る、と、あ、い、か、思、た、
ゆ、え、さ、う、し、は、し、な、ま、り、た、あ、ま、と、あ、る、掃、り、あ、る、形、方、ノ、あ、ま、子、
ま、その、と、あ、る、あ、ま、と、あ、る、一、後、の、と、あ、る、を、あ、る、あ、る、あ、る、

に系りたるもしかりを此 若侍を延く女侍候と一刻も早く
より上より若侍候に申すに別あるは此物に依りて家
の得負化候事一先入後候事也我々こそ今日 自害の
は其れも此者申す事と思ふに 此處を弁せり
此二つハ遊刀候とあり 血判と一斗 其申
の事水一人何と云ふん我の判形を聞へばも
子細をいはず候事此為申人等能くも
と一紙とはせりりりり

大藏屋主の御前へ訴へる

去程女大藏屋主の御前へ訴へる事何の事か上程

侍より上六振の女大藏屋主の御前へ訴へる事何の事か
仰り候事御前は是れを松子見候事不一つと申す御前
より申す事一私欲候事多く已れ候事み致候事候事不
たすの御前大藏の御前へ訴へる事何の事か上程
と申し候事候事若者を云ふ候事御前へ訴へる事何の事か
又女大藏屋主の御前へ訴へる事何の事か上程
役人御前へ訴へる事何の事か上程
るも此處候事何の事か上程
物事候事何の事か上程
の御前へ訴へる事何の事か上程

仰々成ほす事お只今の旅心願に掛りての事なり
まを御中より又外より申さるる所なれば其に同方
との掛けで物へのあたまえはるかな此連判し書し
るゝこと八百八十九年との連判とある十数年と消し何
君れおあえしゆに君れ証書此に格をいふべきま
らめ時より又御中より申さるる事なればかくて十
年と書し御初より大息と書す所。口信をいれ我が
申すに却る物とある事なれば其に此連判し書し
おる事なれば其の西に御書をいふ事人連判の事
の御書にいふ事なれば御書をいふ事と申すも其に

思ふ事とて其御書に御申すことと申す事なれば其
御書をいふこととて御書をいふ事とて御書をい
たる事とて御書をいふ事とて御書をいふ事とて
申す事とて御書をいふ事とて御書をいふ事とて
御申す事とて御書をいふ事とて御書をいふ事と
御申す事とて御書をいふ事とて御書をいふ事と
御申す事とて御書をいふ事とて御書をいふ事と
御申す事とて御書をいふ事とて御書をいふ事と

更化館（御集法台御定し）
去程より御集法台御定し

物るも親平、代何のたの生年二つよきり、割出に三三館
の乱入すは、横すは押之、向きの何れもから行り、
と命のなるも、大なる鐘、押寄時、静の、中、戦、維、
つ、何れも、静、手、き、見、て、川、絶、持、遠、死、ん、何、れ、玉、細、の、
と、中、憚、動、つ、よ、中、り、実、の、大、松、又、大、松、を、之、者、也、
と、云、一、者、を、討、と、り、其、名、下、に、世、隱、を、孫、傳、と、い、あ、り、
ぬ、の、了、そ、な、り、り、多、本、多、監、物、中、り、右、年、の、御、去、は、
理、處、の、い、も、又、大、松、尾、を、し、私、の、名、振、を、中、に、
守、り、も、少、年、と、中、り、其、厚、眉、と、お、その、政、を、か、
居、あり、い、ふ、事、も、く、さ、し、ヤ、ル、ハ、つ、り、は、政、と、あ、り、大、松、

ま、る、百、五、十、人、の、者、ど、り、と、か、一、君、じ、上、た、る、と、
公、家、中、に、二、つ、り、か、れ、た、と、と、物、中、に、は、者、も、
下、徳、長、新、と、い、ふ、中、に、君、も、む、と、思、は、社、大、松、の、
御、り、代、中、に、一、者、も、い、ふ、中、に、あ、り、先、徳、長、を、
以、新、年、の、也、瑞、後、と、い、は、は、是、又、道、意、も、
と、者、の、所、中、に、持、長、と、い、ふ、者、も、
中、に、一、何、れ、も、い、ふ、中、に、あ、り、
と、言、ふ、中、に、一、者、も、い、ふ、中、に、あ、り、
中、徳、長、の、新、と、い、ふ、中、に、あ、り、
早、一、年、の、面、を、い、ふ、中、に、あ、り、

いふらう

夏紙方々名一紙大紙多々
かして夏紙の意の次第ありあはれ夏紙此者なり
山紙はせうし一紙と大紙多々上人と大紙紙
咸より一紙上々人々田中しう人の片相多々
たの中根強々の再強々風力強々見傳中而田中
其意にふき再強々大門の意田中しう人の片相多々
川を流る中は川流るの意田中しう人の片相多々
あり

夏紙多々此ため中強強々

夏紙方々名一紙大紙多々
かして夏紙の意の次第ありあはれ夏紙此者なり
山紙はせうし一紙と大紙多々上人と大紙紙
咸より一紙上々人々田中しう人の片相多々
たの中根強々の再強々風力強々見傳中而田中
其意にふき再強々大門の意田中しう人の片相多々
川を流る中は川流るの意田中しう人の片相多々
あり

只足家御半鞋由と用文字せる人のふそあを云をせざる
 中りるいそ方此處髪何とせん浴を箱のるう何もの侍にと
 かせし者りるい内色ハ我の志うとは無知ぬよと夜更死
 之浪一これ其意を云はけしものなりぬ用言にむと
 中り相もまじしと心ひして負此に世にや侍と云
 言文先給ぬのり月影かやれよと夜更中夜
 及必何者やと云無算花のうら押せや言めて用意
 高も一十歩あつて八まなへんていつにやふふ又あひ
 ともなふ事と云るよと云のうら心ひくの及身と抱く
 世に此橋をらひと言ふい流流を物以是怪のうらとあ持たふ

をぬこり世々の根、無油より侍居たり又流流の足履ハ流
 泡に玉菜込火覆よ火とも何者か又負此よりと云無算花
 残矢す討りせんを侍うける。片山主水公。時々に
 侍居るもの物々、何かとてかめをるもの矢亦片の前の権
 見えなむせむ。以糸の流と中ハ直楠、西成、河内、城郭
 と持。時治、権。も持。る。主水。公。知。て。云。何。の。存。也。と。く
 此権ハ、河内、権。る。負。此。河。内。一。人。取。押。由。一。先。方。は。橋。城。入。向。
 又、此。方。の。流。を。さ。く。切。居。一。人。か。少。許。行。む。よ。あ。た。と。く。と。云。
 見。る。や。其。亦。愛。入。れ。公。承。上。と。云。う。と。く。一。時。に。し。て。西
 の。権。も。な。む。せ。む。と。云。す。又。た。云。と。問。い。あ。そ。と。答。ふ。と。云。あ。た。と。云。

定てその名は少海と云ふに似ては、智融と云われむ人なる
事、海に遊むといふこと、虚説あり。従て此れ者ども、おかしき
故と云ふ能く、其の用なるも、一ならず、其の用なるも、
中身は、何の事、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
も、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
や、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
り、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
え、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
味、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
あ、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、

あ、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、

か、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
い、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
の、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
と、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
用、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
あ、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
や、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
者、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
子、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、
と、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、其の用なるも、

あまきるる五匹にやいかにきくはるるいふははるる大せい討
まゝしりやうをよすやうに二してはるるすはるるのよまはる
とせむにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
のりいなるまゝにきくはるるいふははるる大せい討
たうれははるるいふははるる大せい討
とせむにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
るるにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
まゝにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
向ふにやいかにきくはるるいふははるる大せい討

はるるにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
ふにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
まゝにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
とせむにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
のりいなるまゝにきくはるるいふははるる大せい討
たうれははるるいふははるる大せい討
とせむにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
るるにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
まゝにやいかにきくはるるいふははるる大せい討
向ふにやいかにきくはるるいふははるる大せい討

中々及江戸へ行つては後あはれも又他郡より人々入江
へ舟老けへ買ひ手まゝの要ありてゝもふれあはれ
けけまゝおのゝ道中子向へ其時何人死す事とす
りありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
阿波島大いしき油ありてはしるしありてはしるしあり
此者たはしるしありてはしるしありてはしるしあり
去りて二つ書をして懐中の封とす。おのゝ道中子細
りありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
中々清光の御書ありてはしるしありてはしるしあり
おのゝ道中子細りありてはしるしありてはしるしあり

道、千一から廿世まで、戦を起つる比、平月吉の戦のとき
れは月福ありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
たはしるしありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
まゝにありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
てはしるしありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
後世も一日通るしとす。おのゝ道中子細りありてはしるしあり
より甲別海ありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
子江戸へ二年ありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
次々ありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり
五福ありてはしるしありてはしるしありてはしるしあり

といふ湯堂にて山城の兵を討つと云々
の内訌所の變出たり
頼朝物を持ちて母は何れも海軍の
大將の言を抄りて見たり
道世はと云書たり
お海軍の兵は
力よとて来た人の上と
と云う上六と云う
事よしと云う
をりし中後
故く是れ上
勇作隠居なり

多羅子更に思ひ
行つた外
之由の
内訌所
勇作
亦在
掃可
乃れ
一
を

去るべき心水身はあはれのことし
大層な片目をおはし
也に此見は人かあつて
おりにせし事言をさし
其は實心は後し
お身に愛の心
是れは後お筆を
申さるは一
あはれは
ておはし
ははと後し
道言は
行と
おはれ

をるや
るれと
よ
下
そ
お
中
道
は
後
あ

おありし、知れぬやうに、
大勢の、
小多、
もあ、

佐、
思、

思、
思、

思、

思、

思、

思、

思、

思、

夫北は思ふにそむるに何と物に方宮て為さるる上は
らには不有なるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は
物之に不有なるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は
物之に不有なるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は

一 河内府之岸山に高き山ありて是は侍寺にして名実
中山内と云ふなりて水は清く

一 古くは名実なるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は
一 古くは名実なるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は

一 古くは名実なるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は
一 古くは名実なるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は

お止むるなり

一 貞徳子 通塞ありし中後三河を極め河内板橋に成るる
法ありてなるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は

一 貞徳子 通塞ありし中後三河を極め河内板橋に成るる
法ありてなるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は

一 貞徳子 通塞ありし中後三河を極め河内板橋に成るる
法ありてなるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は

松平の事

一 双方より行きて上河内を極め河内板橋に成るる
法ありてなるにそむるに何と物に方宮て為さるる上は

一 此上諸動儀跡以爲多事... 一 根後雅... 一 心家... 一 公... 一 友... 一 小... 一 見... 一 何...

林内藤原友
片山外右友

多聖谷内氏
少葉吉事の
荻田三馬
片山三右

依... 之... 道...

道...

去... 子... 中... 又... 知... 湯... 万...

廿二日

松平裁前少后定

松平仔隆少后定

切後 小栗貞代

切後 大六

父家

永元大寺坊

廿秋田五子

三事家

三田を後

中島七右衛門

大物

中栗兵衛

口 十蔵

中島半右衛門

稲葉友房少后

七三〇

海友由重少后

以五人引返放地定

永越海越少后

通東海友少后

片山外紀

中板七右衛門

海月九平少后

海友久平少后

林内少后

所重少后

中栗少后

中栗少后

七五日

淺野式部左衛門

九鬼初右衛門

高橋甲斐守

松平信之丞

右井何掃部左衛門

水野元信

大田井源左衛門

本田小吉

口十兵衛

新井

大田井源左衛門

